



南十字星創刊60周年記念  
シンガポール留日大学卒業生協会  
(JUGAS)の新会長  
Ms Shen Yue へのインタビュー



Shenさん

2024年に第14代JUGAS(Japanese University Graduates Association of Singapore)会長に就任されたShenさんにJUGAS、日本での体験談についてお話いただきました。

(実施日:2025年6月7日)

聞き手

シンガポール日本人学校小学部クレメンティ教諭  
いしかわ そうみ ふじかわ しほ  
石川創未、藤川志穂

ー 自己紹介をお願いします。

**Shenさん** 私は早稲田大学で経済学を学び、コロンビア大学では交換留学で1年間ファイナンスを学びました。その後、ハーバード大学で東アジア地域研究を専攻しました。2024年に第14代JUGAS会長に選ばれました。現在会長としての仕事以外に、シンガポールの中国語新聞『聯合早報』でビジネス編集者として働いています。2011年に記者として入社し、シンガポールや政治のニュースを担当した後、ビジネス部門へ移りました。これまでにシンガポール、アメリカ、日本での8回の選挙を取材しました。

ー JUGASとは、どのような会で、どういう目的で活動しているか、教えてください。

**Shenさん** JUGASは、日本で高等教育を修了したシンガポール在住の非日本国籍者の同窓会です。1970年に設立さ



話が盛り上がるインタビューの様子

れ、日本の大学を卒業したメンバーをつなぐ役割を果たしています。現在、約460名のメンバーがいます。

メンバーには、企業の経営者や政府の高官、若手の卒業生、そして退職後も活動に参加する方が含まれています。JUGASは、日本国大使館やシンガポールの日本関連団体と強い関係を築いており、日本文化の理解を深めるための活動を行っています。

また、ASEAN諸国の日本留学生協会とも連携し、学生交換プログラムや奨学金の運営を通じて、日本での学びをサポートしています。2005年には、日本とシンガポールの相互理解を促進した功績により、日本国外務大臣表彰を受けました。

ー 日本の大学で学ぼうと思ったきっかけは何ですか。

**Shenさん** 面白いことに、私は日本で勉強するつもりは全くありませんでした。中学1年生のときからシンガポールのMOELCプログラムで日本語を学んでいましたが、それは選択科目だったので、あまり力を入れていませんでした。授業中にぼんやりしていると、よく日本語の先生に注意されていたのを覚えています。

しかし、私が会社で面接を受けた時、上司から「こんなに長く日本語を勉強しているのだから、日本に行くなら奨学金を与えます」と言われました。そこで、締め切りの約1週間前に早稲田大学に出願し、合格しました。そして、日本へ行くことになりました。

ー 日本の大学で、どんなことを学ぶことができましたか。

**Shenさん** 早稲田大学の近くに引っ越してから、あちこちをゆっくり歩いて、知らなかった東京を発見する楽しみを知りました。早稲田から神楽坂までの散歩は楽しく、まるで昔の京都に行ったような気分になりました。

日本文学を学んでいたとき、東京出身の夏目漱石の作品を読みました。古い石畳の道を歩き、静かな神楽坂の小道を通ると、彼が描いた100年前の東京が今も残っていることに驚きました。



石川創未教諭

— 日本での大学生活で、楽しかったことや苦勞したことを教えてください。

**Shenさん** 東京に行ったばかりの頃、毎朝6時半に起きて、眠い目をこすりながら満員電車に乗って学校に通っていました。電車の中は、前後左右から押されるほど混んでいて、急ブレーキがかかると皆が倒れそうになることもありました。この状況を「寿司詰め」と呼ぶことを知りました。

特に女性専用車両では、女性たちが一列に座っている様子が印象的です。居眠りをしている多くの人は家で化粧を済ませています、電車の中で化粧をする人もいます。彼女たちは電車を自分の化粧室のように使い、周りを気にせず化粧をしています。こうした光景を見ながら、私も自然に化粧のコツを学びました。先生に教わらなくても、こうして学べるのは楽しいことでした。

— 日本に行く前と後で、日本についての印象や考えが変わりましたか。

**Shenさん** 日本に行く前は、日本の一面しか知らず、それがとても美しいと思っていました。でも、実際に行ってみると、いろいろな面が見えてきて、文化的なショックを受け、しばらくの間は不満を感じていました。しかし、物事の見方を変えて、自分の価値観を無理に押し付けけないことにしました。その結果、良い面も悪い面も含めて再び日本を愛するようになりました。花は花として、木は木としてそのまま受け入れることができるようになりました。

— 日本に滞在した期間で、大切な出会いがあったら教えてください。

**Shenさん** 2010年、新潟県十日町の自然豊かで静かな池谷村でボランティアをしました。新潟は米の産地として知られており、ボランティア活動は農業が中心でした。6月は田植えの季節で、2日間田んぼで苗を植え続け、唐の詩人李紳の「悯農」の意味を実感しました。

特に印象に残っているのは、おじいさんとおばあさんが元気に田んぼを耕し、ボランティアを指導している姿です。その情熱に感動しました。復興がどうなるかはわかりませんが、多くの人が農村に戻り、池谷の美味しいお米が続いていくことを願っています。

— 日本に滞在した期間で、今も忘れられない思い出は何ですか。

**Shenさん** 2008年、東京で1年半の間にたくさんの小さな地震を体験しました。初めての地震では、真夜中に目が覚めて揺れを感じ、地震だと気づいて布団にくるまり、机の下に隠れました。2回目も同じように避難しましたが、4回目には何を



藤川志穂教諭

をしたか覚えていないほど慣れてしまいました。しかし、何度も経験するうちに「いつか大きな地震が来るかも」という不安も増していきました。その当時、「関東大地震」の噂もあり、心配は尽きませんでした。日本を離れて8ヶ月後、アメリカで修士課程を勉強していたとき、ある土曜日の朝にパソコンを開いて東日本大震災の映像を見て、衝撃を受けました。以前の心配が現実となり、すぐに日本のホストマザーや友人、教授に連絡を取りました。余震が続いていたため、夜中で



ラウンジでのインタビューの様子

も友人から返信がありました。東京の地下鉄が止まり、歩いて帰宅した友人や、家族と連絡が取れずに泣いていた友人もいましたが、幸い知り合いは皆無事でした。

日本にいたときから心配していたことが現実になり、非常にショックを受けましたが、危機の中で世界中の人々が強い絆と共感を示す姿に心を打たれました。

— JUGASの会長として、今後どんなことを目指していきますか。将来の目標があれば聞かせてください。

**Shenさん** 1970年12月19日、JUGASが設立されました。今年の年末からJUGASは55周年を迎え、シンガポールと日本の外交関係樹立60周年と重なります。

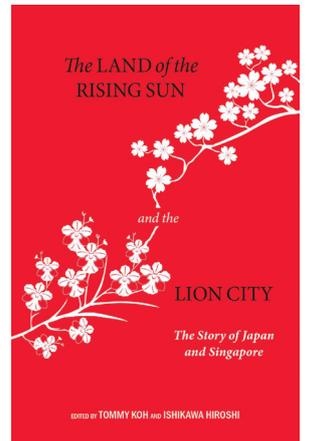
これまでの間に、JUGASは成長してきました。例えば、以前は先輩たちが「協会は理工学部を卒業した男性ばかりだった」と冗談を言っていました。多くの学生が日本で理工学を学んでいたからです。しかし、最近ではリベラルアーツを学ぶ新しい波があり、若い女性メンバーや役員が協会を支えています。変わらないのは、日本で学ぶことの魅力を探求するシンガポールの学生たちが私たちの存在の理由であるということです。先輩方の寛大なご支援により、JUGAS教育・文化交流基金(JECF)のもとで、新しい「JUGAS SJ60記念奨学金2025」を立ち上げることができました。今年の入学選考が完了し、多くの有望な候補者が私たちを驚かせてくれました。

シンガポールからは、現在462人が日本に留学していて、前年より14%増えました。今年の募集活動も引き続き拡大し、より多くのシンガポール人が日本の素晴らしさを体験し、両国の文化の架け橋となることを願っています。

— 最後に、日本人会会員へのメッセージをお願いします。

**Shenさん** JUGASは今年の4月下旬に年次総会を開きました。私にとって初めての司会だったので緊張しました。総会の最後には、最近出版された本のサイン会を行いました。7人のJUGASの先輩たちが『The Land of the Rising Sun and the Lion City: The Story of Japan and Singapore』に寄稿していて、それぞれの物語は特別で貴重です。日本での出会いや思い出、学んだことなど、多くのJASメンバーが共感できる内容だと思います。体験は人それぞれですが、一言でまとめるなら「日本の美しさ」と言えるでしょう。それは成長の過程で得られるものであり、どこにいても感じる郷愁のようなものです。

もしJASとJUGASのメンバーが偶然や意図的に出会うことがあれば、そのつながりを大切にしていきたいと思っています。



Shenさんより思い出のお写真をご紹介します！

2010年6月、新潟県十日町の池谷村でボランティアをしました。田植えの季節で、年配の方々が若者よりも元気に農作業をする姿に感動しました。もっと多くの人が農村に戻り、池谷の美味しい「山清水米」が未来に続くことを願っています。



真剣にボランティアをする様子



田植えをするShenさん



新潟県十日町の池谷村にある田んぼ



田植えを終え、記念撮影

日本で勉強していたとき、新聞に月刊コラムを書いていた。卒業後、そのエッセイのいくつかは『留学博客』という本に掲載されました。特に印象深い作品の一つに、「いつ大きな地震が来るのか」と題したものがあります。これは2008年に日本での留学中に経験した小さな地震について記録したものでした。そして、卒業してから8ヶ月後、東日本大震災が発生し、私の心に永遠に残る出来事となりました。これらの経験を通じて、自然の力の大きさと人間の脆さを痛感し、日々の生活の大切さを改めて感じました。また、日本での留学生活を通じて、一人暮らしや自立についても書きました。



新潟県十日町の池谷村



本『留学博客』に掲載されたShenさんのエッセイ



Shenさんのエッセイ

JUGASは、シンガポールにおける日本の大学卒業生の同窓会組織で、ASEAN諸国の日本留学生協会とつながりがあります。日本における姉妹組織は在日シンガポール留学生協会(SSAJ)です。私が日本にいた頃、メンバーはASEAN諸国の学生と共に、日本の人々に私たちのユニークな文化を紹介する展示会を開催していました。例えば、伝統的なクバヤを着てカヤトーストなどを紹介した展示会がありました。



文化を紹介する展示会にて

隅田川花火大会など、地元の風習に根付いた多くの日本の伝統的な祭りにも参加しました。日本での勉強を通じて、世界にはさまざまな側面があり、人々は根本的に異なることがあると知りました。しかし、その違い(自分自身の偏見や先入観、価値観を含む)を乗り越え、他者の価値観を認めることは可能だと感じています。日本での良い面も悪い面も経験したことで、より柔軟な考え方ができるようになり、今では日本を故郷の一つとして感じています。



隅田川花火大会にて

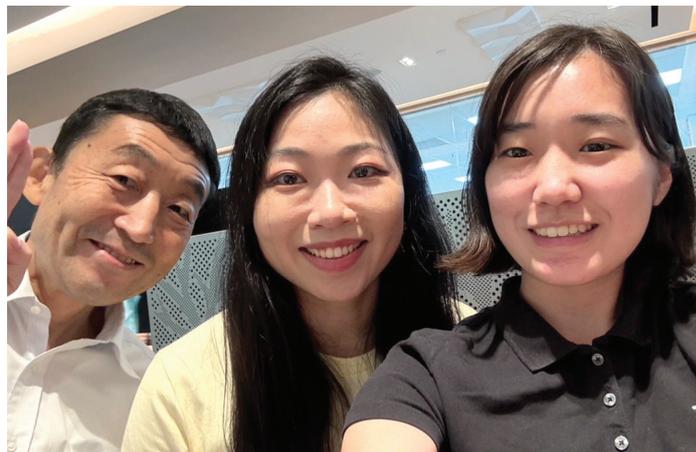
### 編集後談

シンガポール留日大学卒業生協会(JUGAS)の会長Shenさんにお話を伺う機会を得て、とてもうれしく思いました。JUGASがシンガポールと日本の人的文化的交流の架け橋となっていることがよくわかりました。特に、Shenさんが新潟の池谷村で2日間田植えのボランティアをした時に、元気に田んぼを耕すおじいさんとおばあさんの情熱に感動したという話が心に残りました。

編集部 石川創未

今回、JUGASの会長Shenさんにインタビューをさせていただき、個人的には、Shenさんのお答えとともに、お人柄にも感銘を受けました。私たちの質問全てに対して、丁寧に答えてくださるだけでなく、私たちから追加で質問がないかを毎回気遣っていただきました。最後にShenさんの笑顔を中心に、3人で自撮り写真を撮らせてもらったこともよい思い出となりました。

編集部 藤川志穂



(左から)石川創未教諭、Shenさん、藤川志穂教諭